

面打ち矢野啓通と能面写し制作システムの実態 —松坂屋コレクションの朝倉尉面を手掛かりに—

早稲田大学大学

大谷優紀

近世を通じて、能面の模古作が活発に行われていたことは、多くの作例から知られる。模作面制作の際には型紙などの道具が用いられ、モデルとなる面の形状が忠実に再現された。

能面の模作が盛行した要因としては、能楽が江戸期に幕府の式楽、すなわち儀礼用の芸能に制定されたことが挙げられる。江戸期を通じて、能楽は武家に必須の教養となり、能面に対する需要はより高まっていったのである。そして、幕府や大名たちの需要に応える形で、能面制作や模作・鑑定などを専門に請け負う面打ちという職業が登場した。しかし、彼らの活動実態については未だ不分明な部分が多い。

矢野啓通(1828 - ?)は、そうした面打ちの一人であり、幕末期から明治初頭にかけて加賀藩で活躍した人物である。啓通は、藩主前田家の命により、同家の所蔵する面の修復や制作に携わっていたことが記録に残されている。

松坂屋コレクションには、現在前田家旧蔵能面の一部である四十二点の面が収蔵されている。その中に、形状の酷似した二点の朝倉尉面が存在する。面袋の記録から、そのうち一点は万延元年(1860)十月に修復した古面であること、そしてもう一点は同年に啓通によって模作されたことが明らかとなっている。修復を行った人物については記載がないものの、田邊三郎助氏の先行研究においては修復の担当者として啓通が推定されている。さらに、修復を施した面の写しとしてもう一点の朝倉尉面が制作されたことが、同氏によって指摘されている。

二点の朝倉尉面は、多くの類似した造形的特徴を持ち、皺の形状や植毛孔の数といった細部に至るまで一致が確認される。その一方で、一部の植毛孔の数や眉の本数には相違が見られる。

本発表では、この二点の朝倉尉面に見られる相違の理由として、「能面切型図・見取図」(法政大学鴻山文庫所蔵)からの影響を指摘する。同資料は、幕末期に書写された資料であり、能面の型紙・雛形図である。資料中には「矢野重光」の墨書が見られ、啓通の兄が制作し、矢野家に伝来したものと考えられている。

本資料の中には、「朝倉尉切型図」・「朝倉尉見取図」という二点の図が含まれている。そして、これらの絵図と啓通が制作した朝倉尉面の間には、一致する点が数多く見出された。特に注目したいのは、啓通の制作した面の植毛孔の数が、もう一点の古面と相違するものも含めて、全て「朝倉尉切型図」の記述と一致している点である。その他、面の法量も図中の書入れとほぼ合致する。また、「朝倉尉見取図」にある「御用 御面／御修覆」という記述も、前田家の依頼によって啓通が朝倉尉面の修復を行ったことを示していると推察される。

以上の考察から、啓通が「能面切型図・見取図」を参照して制作に活用していたことを示し、江戸時代における能面写し制作の実態を明らかにしたい。